目指せ、世界！海外で活躍する日本人プレイヤー⑱

連載18

井上奈央子 Naoko Inoue

コンチェルト・ブダペスト、アニマ・ムジツェ室内合奏団
ヴァイオリン奏者

「外国に住んで孤立してしまうという時代ではありません。軸をしっかり持ち、複数の文化圏で演奏できる長所を生かして、それぞれの音楽の魅力を光らせられる音楽家になりたい」

文=中 東生
Text=Shinobu Naka

ハンガリー音楽界の檜舞台だったリスト音楽院大ホールが3年の修復期間を経て2013年に蘇った。今回は、このホールのレジデンス・オーケストラ、コンチェルト・ブダペストの団員となった井上奈央子さんにご登場頂いた。

ブダペストでの生活

ブダペストは、「大きすぎず、歩いて行かれる範囲にオペラ座などすべてがあるので気に入っています。この街はいわゆるモダンな遊びの誘惑が少ないので、『古き良きヨーロッパの伝統』を実感しながら勉強に集中できます」と語る井上さん。「ハンガリーの首都なので重要な演奏会も多く、良い物だけを身につけて経験を積んでいける環境」と充実した日々を送っている。

この4月には、ハンガリー音楽界で大きな話題となった小林研一郎のブダペスト国際指揮者コンクール優勝40周年記念コンサート・ツアーの終了祝賀会に出演し、弦楽四重奏を披露した。

音楽を職業とする決意

井上さんは実は18歳の時に、それまで身近だったヴァイオリンを本当に職業にしたいのかと、初めて自分に問う時期があった。

「父が建築家で、美術系の本などに囲まれて育ったので、モダン建築や内装にとても興味があり、建築科を受け直そうかと思ったくらいでした」

3歳でヴァイオリンを始めたのは親の選択だが、「初めて見たものを母親と思い込む動物のように、出会ったその日からヴァイオリンが大好きになりました。毎日練習しないと気持ちが悪く、ヴァイオリンをやめることなど考えられませんでした」。幼稚園の頃にはすでにヴァイオリニストを目指していたが、それはひたすら「ヴァイオリンをもっと上手に弾きたい」という想いだけだった。

「それでもいつかは留学したいと思っていました。東京藝大でドイツ人客員教授に師事していたので、ドイツでマスターコースを受講して、その帰りブダペストに足を延ばしてこの街が気に入りました。あらためて日本でリスト音楽院のマスターコースを受けてハンガリーへの留学を決めました」

「ハンガリーで驚いたのは、学生だけでなく教授陣ですら素朴だったことです。ちゃらちゃらした学生などいないし、有名な演奏家も、ふつうにその辺にいたりと、偉ぶっていないところが心地よいのです」

1年ずつ更新できる留学生用のコースで3年間、そして修士課程に移り2009年に卒業するまでの5年間は、自身の視野を広げることに役立ったという。日本ではソロ曲中心の勉強だったので、周囲と交わる機会が少なかったが、ブダペストではレッスンを聴講したり、様ざまな人たちと合奏ができる土壌があり、それを生かし自身の好奇心や向上心に素直に動き、「音楽という語法を学ぶように心掛け、常にアンテナを張るようになった」という。

本科で師事したサバディ先生から、ストイックさと柔軟さ、そして「コンサート何日前にはどのような調整をして……」といった具体的に数字で表せるようなプロフェッショナルなメンタリティも学んだ。いつも自然体で、音楽を楽しんでいるサバディ先生を通して、クラシック音楽家特有の神経質さをなくすことも覚えた。こうして留学によって身につけた新たな視点から、音楽というものをもう一度見つめ直すことで、音楽家を職業とする覚悟ができたという。

成功への連鎖反応

卒業が迫り、帰国か残るか、将来を賭ける時期が訪れる。

「自分の気持ちに正直にぶつかるようになりました。それに伴う大変さや周りの理解が得られないかもしれない状況も乗り越えてやってみようと覚悟を決めて頑張りました」。

これが起動力となり運命の車輪が回り始めたのである。最優秀卒業生に選ばれ、フランツ・リスト室内合奏団と共演した体験が最初の布石となる。

「この共演で『私はまさにこういう音楽がしたかったんだ』と痛感し、すぐにその合奏団のコンサートマスターであり音楽監督でもあるローラ・ヤーノシュに弟子入りを希望しました」。こうして彼が主任教授を務めるリスト音楽院室内楽科に再入学した。

室内楽科では、2つ目の布石に出会った。2010年にアニマ・ムジツェ室内合奏団を創設したホルバースと同級生となり、11年春に入団した。ホルバースがコンサートマスターと音楽監

督を務めるこの室内オケは、指揮者をおかず、皆が自分の弾きたいように演奏でき、それを舞台上で掛け合いのように展開していくのだという。井上さんが入団した直後にアニマ・ムジツェは、ウィーンの室内楽コンクールで優勝、12年にはハンガリーの新人賞、ジュニア・プリマ・アワードも受賞した。「このオケを軸に経験をつなげていける」と確信し、次なる布石を勝ち取った。

2012年ジュニア・プリマ・アワードを受賞したアニマ・ムジツェ室内合奏団

コンチェルト・ブダペストがレジデンスとなったリスト音楽院大ホール

さらに、2013年9月にはコンチェルト・ブダペストのオーディションを受け合格、3カ月の試用期間を経て14年1月より正団員となった。このオーケストラは、ハンガリー国立フィル、祝祭管に次ぐブダペスト第3の地位を誇る、70名からなる楽団だ。井上さんが小学3年生の頃に聴いて感動したレーピンとの共演もこのオケで実現した。

複数の文化圏で演奏できる時代

日本にも布石が敷かれており、今年は横浜シンフォニエッタのシーズン・メンバーに名を連ねている。

「先輩たちが組織したオケで、山田和樹さんを中心とするその活動に留学中も励まされていました。リスト音楽院卒業後の2010年から参加させて頂き、他の演奏会も含めて年3～4回帰国しています。自身の成長を試せる大事な機会です」

「今は、外国に住んでいるからといって孤立してしまうという時代ではありません。ネットなどを通して時差に邪魔されず世界と繋がっていられるので、居を構える場所にはこだわりません。軸をしっかり持って、複数の文化圏で演奏できる長所を生かし、それぞれの音楽のスタイル、その肝となる部分を、魅力としてキラッと光らせられるような音楽家として、生き生きとしたコミュニケーションができるようになりたい」と井上さんは語る。

転機をもたらしたフランツ・リスト室内合奏団音楽監督ローラ・ヤーノシュと

国境を越え、「音楽」という言語を通して感動を共有できるヴァイオリニストになっていくことだろう。

■井上奈央子
Naoko Inoue

東京藝術大学音楽部附属音楽高等学校を経て東京藝術大学卒業。ヤマハ音楽振興会、ロームミュージックファンデーションの奨学生としてハンガリー国立リスト音楽院に留学。2009年修士課程を最優秀で修了。音楽院より選出され、フランツ・リスト室内合奏団とベートーヴェンの「ヴァイオリン協奏曲」を共演。その後、同音楽院室内楽科に在籍し、リスト室内合奏団音楽監督でもあるローラ・ヤーノシュ主任教授の下で研鑽を積む。11年よりブダペストを拠点とする、15名の若手弦楽奏者によって新設されたアニマ・ムジツェ室内合奏団のメンバーとなる。12年、伊・ヴィンセンツォ国際コンクール室内楽部門第2位受賞。14年1月よりコンチェルト・ブダペストに在籍。

■アニマ・ムジツェ室内合奏団
Anima Musicae chamber orchestra

2010年創設。アニマ・ムジツェとは「音楽の魂」という意味。創設翌年の11年にはウィーン楽友協会で行われたズンマ・クム・ラウデ国際コンクールで優勝。12年、ハンガリーで今後の活躍が期待される若手演奏家に贈られるジュニア・プリマ・アワードをオーケストラとして初めて受賞、またブダペスト春の音楽祭やコダーイ音楽祭などに出演するなどハンガリー国内はもとよりウィーンやハンブルクでも演奏会を開き、精力的に活動を続けている。今年6月末にはパリ公演を予定している。

■コンチェルト・ブダペスト
Concerto Budapest

2009年創設。その前身は1907年創設のマジャール・テレコム・シンフォニー・オーケストラ。2007年にケラー四重奏団リーダーのアンドラーシュ・ケラーが音楽監督に就任し、ハンガリーを代表するオーケストラに育て上げた。09年に改称した後は、複数のスポンサーに支えられて活動しており、この新生オーケストラの主要パトロンはジェルジュ・クルタークである。国内はもとよりアメリカ、ヨーロッパにツアーを行い高い評価を得た。13年12月より国立フランツ・リスト音楽院のレジデンス・オーケストラとなった。